



Vision

研究領域外からの情報に期すもの

京都大学大学院医学研究科

河野 憲二

研究の場を経済産業省傘下の研究所から大学医学部に移して3年が経ちました。私自身の研究の対象や興味の変化はないつもりでしたが、周りの環境の変化を受け、気づかぬうちに今までとは少しずつ異なる方向に向いているような気がしています。

大学に移る前の研究の場では、経済産業省の傘下の研究所ということで、経済発展や新しい産業の創出を目指した研究成果が求められていて、多様な研究領域（ディシプリン）に基盤を持つ研究者が参加する、トランスディシプリナリな枠組みでの研究が志向されていました。私はそれまで学んできた、医学、生理学、神経科学をバックグラウンドとして、工学、数学、情報科学等をバックグラウンドとして持つ研究者と交流しながら研究を進めることが期待されていました。医学部での研究しか経験のなかった私には、新鮮な体験として感じられた研究生活でしたが、他の研究領域は、その最先端の活動を理解するにはあまりに遠くに見え、また逆に周りから求められる知識は、自分が学んできた守備範囲をはるかに超えた範囲にまたがるものでした。特に、短いタイムスパンで応用までに結びつく成果を挙げるといふ期待にこたえるには、力及ばずの感を強く抱いていました。

研究所から、大学に戻ってきてみると、私が卒業した30年ほど前の医学部とは臨床、教育、研究とあらゆる面で大きく変わっていました。現在、学部の学生には、神経科学のうちの機能面につい

での講義を行っていますが、この分野でも私の研究対象とは直接の関係がなかった、細胞生理学、分子生物学などでの目覚ましい発展があります。毎年行われる生理学会の大会にはほとんど参加してきていたつもりですが、自分の研究対象と直接の関係がない領域での発表にまで足を運ぶことは少なく、研究の最前線の拡大は頭で理解していても、実感として捉えていなかったと痛感しています。大学医学部では、周りに近い分野の専門家がいることから比較的狭い領域に限定して自分の研究を深め、進めていくことが可能ですが、逆に自分の中から研究テーマを生み出し、自分で研究を進めるため、閉じた研究に陥る可能性もないとはいえません。産業応用に直接結びつける必要がない、基礎的な研究でも、袋小路に迷い込んで突破口が必要な時など、遠い領域の研究からの情報が自分の研究の立場と方向を確認するヒントを与えてくれる可能性があります。

現在、生理学会でも地方談話会の意義が再認識されているようです。大きくなった生理学会大会では、現在自分が進めている研究のための情報を得る場として、近い研究領域のシンポジウムなどに参加しがちです。地方談話会に参加してみると、コンパクトな会場で、生理学全般のフィールドにわたる発表を聞くことができ、自分の研究対象とは直接の関係がない領域についての知識を得るのに、よい機会を与えてくれることを実感します。既成の方向性を変える探索的創造的研究活動を導

くには、このような機会をいかして、自覚的に自分の立場を理解することが有意義だと考えられますが、研究者それぞれがディシプリンを超えた範

囲にまたがる理解を深めるだけでなく、学会が結果を求めないコラボレーションを推奨し、サポートすることも必要であると考えています。